

## I. はじめに

チュルゴの、主に生産と分配のメカニズムを中心に分析した『富の形成と分配にかんする諸考察』(1766)は、18世紀フランス経済学の集大成であり最高傑作のひとつといえるが、それとはやや異質なアプローチともとれる『価値と貨幣』(1769)をも比較検討することで、チュルゴの「貨幣観」と「価値観」について明らかにしたい。

チュルゴは、未発刊で最後の重要な論稿の1つである『価値と貨幣』において、貨幣の役割や銀行券について詳細に論じ、価値については主観価値説の立場から独自の見解を展開している。彼は、GalianiやGraslinを読み、その上でかれ自身の「交換の理論」を提示した。商品の交換は、各個人の主観的な価値付けによって基礎付けられるが、一方で、交換価値それ自体は、いかなる主観価値にも等しいとはいえない。市場で成立する交換価値(=市場価格)は、人びとの主観的な価値付けを平均したものとして現れる。そして交換行為は、少なくとも主観的な価値付けによって交換を行う人びとの動機に関わる限りは、「等価交換」ではなく「不等価交換」として考察されるべきであるとした。

## II. 資本形成と貨幣の役割

1. ローシステムの崩壊：ローは、富の源を「潤沢な貨幣」に見た。彼によれば、危機の原因の1つは貨幣の不足である。金や銀などからなる貨幣ストックは、それが十分な速さで流通しないのであれば何の意味も持たず、何ら本質的な価値を持たない「紙幣」の方が、最大の流通速度を達成するには遥かに便利な装置である。しかし、紙幣の過剰発行によって証券市場で巻き起こされたバブルはやがて弱気に転じることで崩壊し、ローの設立したミシシッピ会社は破綻する。1720年の終わりには、紙幣さえもがその法貨としての地位を失った。

人びとは「貨幣の増刷は国富の増大に大いに寄与する」というローの思想の崩壊によって貨幣に対する幻想を打ち砕かれ、富とは実際何なのかについて真剣に考えるようになった。

2. 「紙幣についての書簡(Cicé神父への書簡)」：チュルゴは1749年に書いた「Cicé神父への書簡(通称「紙幣についての書簡」)」ですでにローシステムを議論し、紙幣システムの限界を指摘している。彼は直接にはTerrasson神父の議論を取り上げたが、真のターゲットはローシステムであった。実際、彼は、ロー自身、自分の業績を十分に理解していたとは言い難い、とまで述べている(Turgot, 1749 [1977]: p.2)。チュルゴは、Terrasson神父が、商人が自己資本の10倍の大きさの信用を得る可能性について言及し過剰借入を支持したことに対して、そのような過剰借入は利子すら払えるはずもないとして批判した。信用の大きさは通常、借手の自己資本を超えてはならない。チュルゴは「信用」について次のように記す；

「商人がその信用によって作り出す利潤が、彼の手持ちの資金によって得られる利潤の10倍に相当するとしたら、それはひとえに彼の勤勉によるのである。商人がその手に渡る貨幣

から利潤を生み出すことができるのは、その返済の厳守に自信があるからである」<sup>1</sup>。  
チュルゴは、商人はその所有する貨幣や資産の 10 倍の手形を振り出すことができると考えることなどまったく馬鹿げていると述べている。彼は、カンティロンと同様、産業社会を前進させるためには企業家精神が必要なことを理解していた<sup>2</sup>。

3. 貯蓄と投資：貨幣の重要な役割の 1 つに、投資と貯蓄のリンクがある。貨幣が社会に導入されることで、剰余を新たな資本に変換する際の困難を克服できるようになった。剰余は生産者の生産物が販売された後に、貨幣の形態で現れる。マーフィーによれば、チュルゴには 2 つの投資行動が存在する。すなわち、(1) 自己金融による投資と (2) 借入による投資である (Murphy [2009], p.146)。マーフィーは、チュルゴは『考察』の段階では、金融システムについての考察が不十分であったために、投資と貯蓄の間にいかなるリンクも見出せず、結局は、企業家は彼ら自身の貯蓄によって投資資金を賄うほかないと考えた、としている。しかし、実際にはチュルゴは借入による投資モデルについても考察している。もし企業家が投資資金を必要とするなら、貸してくれる誰かを探すだろう。そして十分な貯えがある人物がそれを他人に貸したいと思っているなら、借手と貸手の間に「貨幣市場」が組織されるはずである。チュルゴは、まさに利子率こそが、貨幣市場で貯蓄と投資を繋ぐ役割を担っていることを十分に認識していた。彼は、利子率は、他の商品の価格と同じように、貨幣の需要と供給によって決定されるに違いないと信じていた。

これに対して例えばリカードゥやマルクスの見解は異なっている<sup>3</sup>。彼らにとっては、資本設備を稼働させることで得られる利潤こそが利子をもたらすのであって、その逆では決してありえない。マルクスは『資本論』の第 3 巻で次のように語る；

「資本としての貨幣の価値は、…それがその所有者のために生産する剰余価値量によって、規定されている。…利子率の「自然的な」率なるものは存在しない」

(『資本論』第 3 巻第 5 編第 21 章 38 ページ)。

「利子は、産業資本家によって貨幣資本家に支払われるべき、利潤中の一部分であるにすぎないから、利潤そのものが利子の最高限界として現われ、その場合には機能資本家に帰属する部分はゼロとなるであろう。…利潤率の高さが資本主義的生産の発展に逆比例すること (…) から、1 国における利子率の高低も、同じく産業的発展の高さに逆比例することになる。…利子 (率) は一般的利潤率によって、調節される」

(『資本論』第 3 巻第 5 編第 22 章 40-43 ページ)。

古典派やマルクスは、利潤率はその社会の発展度合いに応じた「自然的」利潤率なるものに制約され、社会の発展とともに資本蓄積が進めば利潤率は自ずと低下する、と考えた (特にマルクスにおける利潤率の傾向的低下法則)。そしてそのような性質を持つ自然的利潤率、す

---

<sup>1</sup> Turgot [1749], p.2.

<sup>2</sup> Turgot[1749], p.2 で借手の企業家の勤勉さ (industry) を強調している。

<sup>3</sup> リカードゥは、資本設備を稼働させることで得られる利潤こそが利子をもたらすのであって、決してその逆ではない、と力説する。リカードゥ [1987] 第 21 章より：「利子率は究極的かつ永続的には利潤率によって支配される (p.121)」。「セー氏は利子率が利潤率に依存することを認めている。だが、それだからといって、利潤率が利子率に依存することにはならない。一方は原因であり、他方は結果であって、いかなる事情もそれらの位置を変更させることはできない (pp.123-4)」。

なわち平均である一般的利潤率の高さが利率の上限を画する。これに対して、利率と利潤率の関係についてのチュルゴの理解は彼らと同じではない。

「貸付け価格（利率（引用者））とは…決して、借手が、その使用権を買い取る資本によって、手に入れたと思う利潤にもとづくものではない。この価格（利率（引用者））は、すべての商品の価格のように、…供給と需要との均衡によって決められる」<sup>4</sup>。

上に述べたように、彼によれば利率は、資本として利用しうる貨幣（あるいは広く資産）の多寡、言い換えれば、貨幣の需給でその水準が決定される。社会で節約の機運が高まり、貨幣に対する需要に比べてその供給が増えれば、利率は低下する。ただしここでチュルゴが、利率の決定に与る資本を必ずしも貨幣に限定せず、生産・商業活動に投下される動産一般で良い、とかなり広く解釈している点に注目すべきである；

「利子の価格は直接的に借手の需要と貸手の供給の關係に依存する。そしてこの關係は、資本が貨幣として存在するにしても、あるいは商業においてある価値を有する・貨幣以外の物として存在するにしても、資本を形成するために収入と年生産物の節約によって蓄積された動産の富の量に主として依存する」<sup>5</sup>。

利率を決定するものは、貴金属に限定される必要は必ずしもないわけで、利率は「資本を形成するために蓄積され保蔵された価値の量に關係」し、「これらの価値が金属であろうと他の物であろうと、その物が容易く貨幣に変えられるのでさえあれば、どうでもよい」(Turgot [1766], p.84)。そしてヨーロッパにおいて、国民の「節約の精神」は絶えずその資本の総額を増大させてきた<sup>6</sup>。

「貨幣利子は数世紀来たえずヨーロッパにおいて低下したのであるから、このことから節約の精神の方が奢侈の精神より一般的であったと推断すべきである」<sup>7</sup>。

チュルゴは、利潤率が低下してきたから利率も低下したのではなく、長期に渡って節約の精神が支配的であったために、資本として利用可能な貨幣が潤沢に存在し、それが低い利率をもたらしたのだと主張したかったに違いない。低い利潤率が成立しうるとすれば、それは低い利率の結果であって、その逆ではないのである。

### III. チュルゴの貨幣観

チュルゴは『価値と貨幣』で、貨幣について5つの要点を挙げている；

(1) 貨幣は、言語や物差しのように、一般的な共通の尺度になり得る。その形状は一見してさまざまであるが、共通の用語あるいは標準によって同一のものにすることができる。実際、さまざまな人びとの異なった尺度や異なった言語は、比較可能であり、通訳もできるだろう<sup>8</sup>。

(2) すべての国の通貨の共通用語 (common term) は、貨幣が測ろうとするすべての商品の実際の価値である<sup>9</sup>。しかし「この価値はそれに相当する貨幣量によってのみ表わされるから、貨幣は他の貨幣によってのみ評価されると結論できる。それは、ある言語の音声は他の

<sup>4</sup> Turgot [1766], p. 77.

<sup>5</sup> Turgot [1766], p. 84, paragraph 80 の見出しから。

<sup>6</sup> Turgot [1766], p. 84 参照。

<sup>7</sup> Turgot [1766], p. 85.

<sup>8</sup> Turgot [1769], p.133 を参照。

<sup>9</sup> Turgot [1769], p.134.

言語の音声によってのみ説明されうるのと同じである」<sup>10</sup>。ここでのチュルゴの説明は、いわゆる購買力平価説ともとれるわけで、それを異なる言語の翻訳可能性になぞらえているところが興味深い。

(3) 貨幣には2つの側面がある。1つは「現実の貨幣 (real money)」であり、「金属でできているエキュールイヤクラウンやギネアである」。もう1つは「仮想通貨 (fictitious money)」で、その役割は「計算貨幣 (money of account), あるいは価値尺度 (numéraire)」と呼ばれるものである。チュルゴは、貨幣を比較したり交換するためには、さまざまな国の貨幣のこれら2つの特徴について知ることが重要であることを認識していた<sup>11</sup>。

(4) moneta から pecunia へ：本来の正しい意味での「貨幣」という言葉は、特定の重量があり標準になる金属片を指し、「現実の貨幣 (monnaies réelles (= real money))」に対応する。ラテン語では、moneta にあたる。しかし、貨幣は価値の「尺度」であり「保証」でもある。チュルゴにとって実際、貨幣が何でできているかということは大した問題ではなかった。貝殻や家畜も古代社会では貨幣の役割を演じた。「信用状に紙幣という名が与えられるのはこの意味においてであり、それも貨幣である」<sup>12</sup>。ここでは純粋に抽象的な貨幣単位であり、チュルゴ自身論じている「銀行券 (bank money)」と呼ばれる貨幣の特徴は、ラテン語で言い換えれば pecunia であろう。

#### IV. 交換の理論 —— 効用, 主観価値, 交換価値 ——

前半でチュルゴの効用理論について概観し、後半でその交換理論を明らかにする。

(1) はじめに、チュルゴの価値付けについての考えが、いわゆる「個人主義」に根ざしたものであったことを明らかにしなければならない。かれは、価値という言葉について次のように説明する；

「われわれは、対象とされる物についてそれに内在する実際の質を見、それによってその物が有益かを判断する。価値という言葉はこの意味において、他人との交渉を一切有しない孤立した人間にも当てはまるだろう」<sup>13</sup>。

財の有用性についての順番付けは主観的であって、同時に、その希少性に依存する。一方、ただ1つの物であっても、その一般的な有用性を問うことはできるという意味で価値がある、と言えるかもしれないが、他の物の価値と比較されなければ、「この物は価値はあるが少しも評価されない」<sup>14</sup>。こうしてチュルゴは、財の効用の測定的前提として、複数の財のあいだでの「価値の比較」、すなわち選好順位というアイデアを導入した。諸々の環境や条件についての考慮によってウェイトづけされたり修正されたりする（他の財の賦存状態や豊かさの状態に依存する）選好順位にもとづいた価値づけはまだ孤立した個人についてであって、彼は、この価値を「尊重価値 (valeur estimative (= esteem value)) と名付けた。「それ (=尊重

---

<sup>10</sup> Turgot [1769], p.134.

<sup>11</sup> [1769], p.134 を参照。

<sup>12</sup> Turgot [1769], p.136.

<sup>13</sup> Turgot [1769], p.137. 選好体系は孤立した個人にも備わる、との指摘はダニエル・デフォーの『ロビンソン・クルーソー』[1719]を想起させる。

<sup>14</sup> Turgot [1769], p.137.

価値)は人びとが自分の欲するさまざまな対象物に付与する尊重の度合いの表現である」<sup>15</sup>。ここで、チュルゴが財の効用を評価するにあたってその希少性を重視していたことを強調しておきたい。水は、一般的な意味で価値(有用性)はあるが、その追加的な価値は、利用される水がすでに多ければ小さい(限界効用の逓減)。すなわち、水の限界効用はその賦存状態に依存し、かつ、他財の賦存状態にも影響されるのである。

(2) 次にチュルゴは、商業の発生、と名打って、検討範囲を、孤立した人間による価値付けの問題から、2人の人間を組み合わせた「交換の問題」に拡大する。彼は、財の交換は人びとがさまざまな財に付与する尊重価値の比率が異なることで実現する、と考えた。

(3) チュルゴにとって、交換は不等価交換である。ここで、チュルゴによる不等価交換のアイデアをまとめてみよう。いま市場にAさんとBさんがいて、彼らは2種類の異なった財、aとbを持っていると仮定しよう。以下で、 $V_j^i$ はiさん( $i=A, \text{ or } B$ )によって評価される第j財( $j=a, \text{ or } b$ )の主観的な尊重価値を表わす。それぞれの財の市場価格を $P_a, P_b$ で表わすと、チュルゴにしたがえば、市場で次の関係が成立する；

$$\frac{V_b^A}{V_a^A} > \frac{P_b}{P_a} > \frac{V_b^B}{V_a^B}$$

第a財と第b財について、市場で相対価格、 $\frac{P_b}{P_a}$ が成立しているとする。このときAさんにとって、b財とa財の尊重価値の比率は相対価格よりも高く、Bさんにとっては、その尊重価値の比率は相対価格よりも小さい。したがってAさんは手持ちの財のうち、市場価格に比べて相対的に主観価値の低いa財を売ろうとし、Bさんは市場価格に比べて主観価値の低いb財を売ろうとする。もちろん、両者の尊重価値が市場価格よりも低ければ、ともに第b財を売りに出したいわけで、その場合はb財の市場で超過供給が発生し、その価格 $P_b$ は上記の式が再び成立して両者で交換が可能になるまで低下するだろう。このようにチュルゴは、市場で成立する交換価値(市場価格)と主観的な尊重価値との相違に基づいて交換が発生すると考えた。

チュルゴは、主観的な尊重価値は市場で成立する交換価値とは直接には何の関係も持たないと主張し、交換価値は客観的な価値である、とする。交換価値は、市場において人びとの主観価値のあいだのどこかで決まるであろう。

## V. 結びにかえて

チュルゴは、ローのシステムを厳しく批判しながらも、決して貨幣を金や銀に隷属させず、むしろ誠実な企業家精神にもとづく手形の発行や信用による銀行券の発行を積極的に認めた。一方、チュルゴは、交換は人びとの財についての主観的評価が異なることから発生することを突き止め、交換の必要条件を主観価値の比率と相対価格の相違に求めたのであった。遡ることができるのである。

<sup>15</sup> Turgot [1769], p.139.

